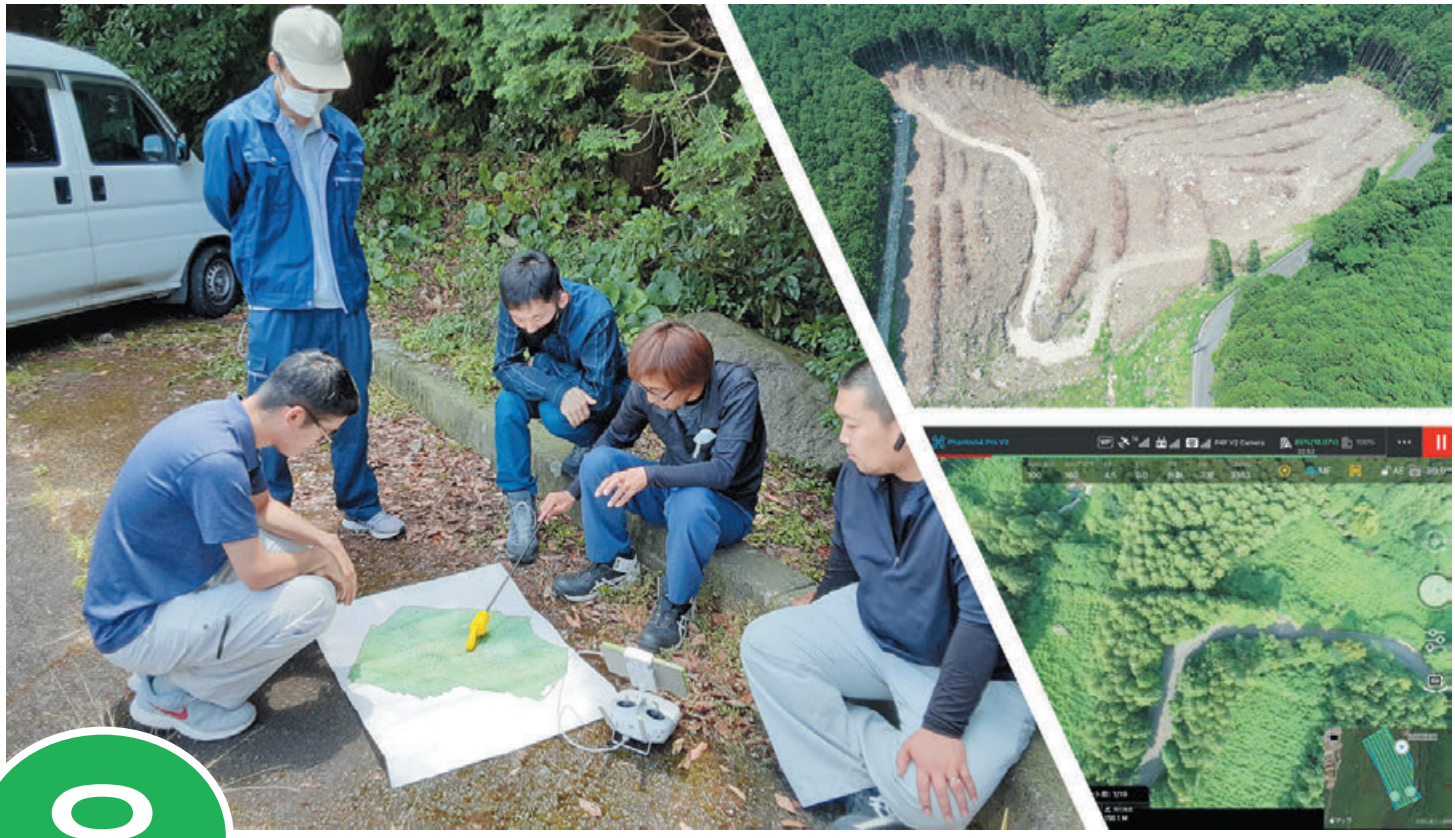
令和３年８月１０日発行（毎月１回発行）　第７９１号

長崎の林業

小曽根星堂書



スマート林業への取組(ドローン空撮による検査用務の労力軽減の検討)R3.6.25(雲仙市)

8

目　次

●林政だより　林業労働災害の撲滅に向けて（山で働く皆さまへ）……2～3
●特集記事　東京から移住し自然と共存する暮らしと
地元の木材で創ったカフェで地域の拠点を目指す
長崎市下大野町「カフェ オジモク」小溝さんご夫妻 …4～5
●林業普及だより　県北地区　路網推進チームの取り組み…… 6
●地方だより・島原　「 森林ＧＩＳ研修会 」を開催…… 7
●地方だより・五島　ツバキの実の収穫に向けて
ーツバキの育成マニュアルよりー…… 8
●林業団体情報　山地災害の未然防止に貢献する
「山地防災ヘルパー協会」…… 9
●センターだより　身近な花が教えてくれる、ツバキの実の収穫適期……10
●紹介コーナー　西海市　タイニーハウス西海モデル……11
●長崎の山　琴ノ尾岳451.3m（長与町・諫早市）　……12

「長崎の林業」は、ながさき森林環境税により発行しています。

2021
No.791

木づかい推進で地球温暖化を防止しよう！

ながさき森林環境税の取組についてはこちら→

森林ボランティアに興味のある方はこちら→

FREE　ご自由にお持ち下さい。

「長崎県庁」のホームページ「広報」→「県の発行物」からもご覧いただけます。

林政だより

林業労働災害の撲滅に向けて（山で働く皆さまへ）

はじめに

山で働いている皆さま、季節を問わず、日々厳しい労働環境の下、長崎県の林業を支えてくださりありがとうございます。

林業での労働災害の発生率は、高性能林業機械の導入や防護衣等の普及により減少したものの、ここ 30 年間は下げ止まっており、全国の死傷者数年千人率は全産業の約 10 倍と高い状況にあります。（休業４日以上の死傷者数、全産業平均 2.3 人／年、林業 25.5 人／年（令和２年））

また、死亡災害のうち、かかり木処理など伐倒作業中のものは約６割を占めています。

保護帽、防護衣、防護ブーツ、フェイスガード、イヤーマフを身に着けていたとしても、不意に伐倒木が向かってきたら一溜まりもありません。

正確な伐倒技術と安全な退避方法、正しいかかり木処理により事故を未然に防ぎましょう。

かかり木処理禁止事項と放置する場合の明示方法

夏真っ盛り

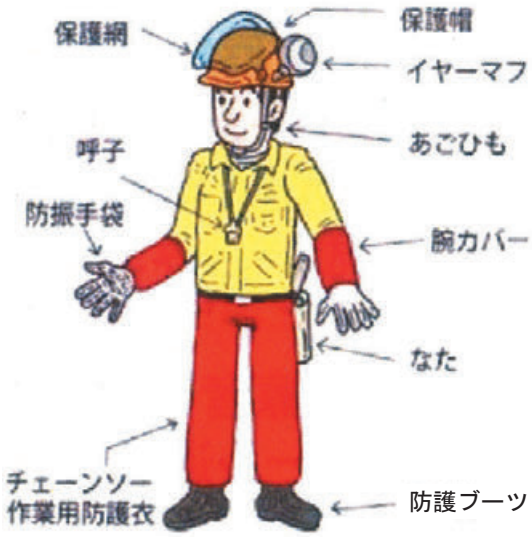
夏場での作業は、ハチや毒ヘビ、マダニなどの外敵から身を守る必要があります。

外敵から身を守れる通気性の良い服装とエピペンの携行等をお願いします。

されど、これから炎天下で蒸し蒸しする中での作業となり、熱中症の発症リスクが高くなります。

熱中症とは、高温多湿な環境下で体内の水分と塩分のバランスが崩れたり、体内の調整機能が破綻するなどして発症する障害のことです。

熱中症を防ぐための、給水、給塩、休憩の「３Ｑ（きゅう）行動」をこまめに行い、自ら身を守ってください。



防護衣等の着用例

「ながさき伐木チャンピオンシップ」

伐木技術と安全技術の向上を目的に「ながさき伐木チャンピオンシップ（※１）」を計画しています。

伐木技術の向上はもちろんのこと、安全面に重きを置いて、「目指せ！林業安全県日本一」をテーマに本大会を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の発生状況をふまえて昨年度から開催を延期しています。

今後の発生状況を見ながら開催時期や実施方法を検討していきます。出場予定の方へは

ご迷惑をおかけしていますが、ご理解を賜りますようお願いします。

チャンピオンシップを通じて、現場技術への応用、選手間相互の技術研鑽により、県内の伐木技術の向上と労災の撲滅に結びつくことを期待しています。

伐木競技の練習会

「林業労働災害撲滅研修」

６月 15 日から 16 日にかけて開催された、林業労働災害撲滅研修（前期）では、ベテラン技能者を対象として、林業の仕事を安全に永く続けられる取り組みと新たな伐木技術とその指導方法について研修がありました。

座学では、加齢による身体能力や認知・判断機能の低下により、労働災害発生のリスクが高くなるとの話がありました。

また、実習では、チェーンソーの安全操作と伐木トレーニング方法の説明がありました。

全国の年齢別死亡災害発生状況は、50 歳以上が８割を超えています。（死亡者 36 人、うち 50 歳以上 30 人（令和２年））

受講者からは、「最近は足が上がらず躓（つまず）いたり、転倒することもしばしばある」、「今後の指導に活かしたい」との声もあがっていました。

これまで現場の主役だったベテラン技能者は、自らの安全作業はもとより、若手の技術指導や後継者の育成が重要な役割になってくるものだと感じました。今回のトレーニング方法（※２）は、現場のチーム全員が取り組まれることで組織力アップに繋がることと思います。

新たに林業へ参入された方へ

林業は危険との隣り合わせですが、正しい知識と技術を身に着けることで、安全確保ができ、確かなやりがいを感じることができます。草が生い茂った植栽地では、下刈り作業が終わって山を振り返って見てみれば、一面きれいさっぱりになって植栽木の活き活きとした姿を見ることができます。真っ暗闇の森林では、間伐することで太陽の日差しが注ぎ込み明るい林内になります。それらを見た森林所有者が喜んでくれたときは感激もまたひとしおです。せっかく出会っていただいた山の仕事です。確かな技術を身に着けていただき、やがて後輩を指導していただく存在になられることを期待しています。

おわりに

作業効率を上げることも経営上必要ですが、一度事故が発生したら経営の危機を引き起こすこともあります。「安全」を何よりも優先させること、すべては「安全」が第一、として作業を行ってください。

みなさまには大切な家族、友人、同僚がいます。毎日笑顔で帰宅できるよう安全作業の徹底をお願いします。

※１：
林業技術、安全作業および林業の社会的地位の向上等を目的として伐木技術を競う。
日本（ＪＬＣ）の代表が世界（ＷＬＣ）に挑戦する。（Logging Championships）

※２：
①チェーンソーの操作技能基本トレーニングテキスト【受講者用】
http://www.ringyou.or.jp/publish/detail_1593.html（無料公開）
②チェーンソーの操作技能基本トレーニングテキスト【指導者用】
http://www.ringyou.or.jp/publish/detail_1591.html（無料公開）

（林政課普及指導班）

【特集記事】東京から移住し自然と共存する暮らしと地元の木材で創ったカフェで地域の拠点を目指す

長崎市下大野町「カフェ オジモク」小溝さんご夫妻

「café ozimoc（カフェオジモク）」オーナー小溝（こみぞ）　淳（あつし）さんと奥様の愛（あい）さん

長崎市下大野町は、西彼杵半島のほぼ中央に位置する標高 352 m程の大野岳の麓にある集落の町です。潜伏キリシタンが開拓した信仰の地として知られ、2018 年６月には「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として、同地区大野教会堂を含む大野集落が世界遺産に登録されました。大野教会堂は、1879 年に外海地区の布教活動に訪れたド・ロ神父が私財を費やし、地域の信者と共に建設した西洋式技術が色濃く見られる小さな教会堂です。このド・ロ神父の活動に感銘を受け、東京から移住し世界遺産の隣の地に生活と生業の拠点を置いたご夫婦がいらっしゃいます。「café ozimoc（カフェオジモク）」のオーナー小溝淳さんと奥様の愛さんです。

東京から移住しゼロから始めた生活

今から 15 年程前、東京から長崎への移住を決めた小溝さんは理想の居住地を探していました。その候補地として以前テレビの特集で見たド・ロ神父の活動に憧れを抱いていた淳さんが大野集落を訪れた際、ふと目を向けた教会堂の程近くの丘の上に廃墟と化した古民家を見つけました。自然に囲まれた静かなその場所は、まさに探していた理想の環境でした。そこからなんと足掛け 13 年。試行錯誤の末、自らの手でカフェと併設する自宅を作り上げました。

（左）柔らかな日差しが差し込むカフェ店内
（右）店内には小溝さん手作りのカウンターや椅子も

地元の木材へのこだわり

当初築 130 年の古民家は、屋根に穴が開き柱も傾いていました。地域に良い木材があるならそれを使って創り変えたいとの思いから、地元の大工さんにアルバイトで雇ってもらって技術を学び、沢山の木材に触れる機会を作ったそうです。屋根の補修と棟の起こしだけはプロに任せ、残りの内装外装は全て自分の手で進めました。地道な作業を見た地域の人からの助けも増え、繋がりが出来た森林組合の方からは虫食いで売れない木材を、知り合いの幼稚園からは山林開拓の際に出たヒノキを沢山譲ってもらいました。地元の木材

を使って古民家を再生させる小溝さんの想いは地域の人たちにも受け入れられていたのです。

（左）お手製の商品棚と市内の作家さんの作品
（中、右）店内の小物やカトラリーも手作りのもの

自然との共存を大切にする暮らしを

昔から大野岳の恩恵を大切に守り、受け継いできた大野集落。大野岳は豊かな水源を有し、麓の地域では大野岳からの豊かな水の恵みを頂いています。現在は水道も通っていますが、小溝さん宅では炊事、飲料水以外は今も全て山水を使用しています。「自然の中でその恩恵を大切に活かす生活を送りたい」という強い想いがこの大野集落への移住を決断させました。そんな小溝家のお風呂はもちろん五右衛門風呂。薪を焚いて山水を沸かします。冬になると薪ストーブが大活躍だそうです。

（左）小溝家のリビングにあるご自慢の薪ストーブ
（右）ストーブとお風呂用の薪　冬に備えて準備中

小溝家はトイレにもこだわりがあります。「コンポストトイレ」です。木材のチップを使い、微生物の力を借りて分解処理する環境に優しいトイレです。用を足した後、ハンドルを回し空気を取り込みながらチップと攪拌（かくはん）させ微生物の力で分解された後、質の良い堆肥となってまた再利用できるというものです。トイレに使用している広葉樹のチップは自宅の薪割りで出た木くずや、木工の削りくずを使っています。ここでひとつ気になったのが、熱く語る淳さんの隣で苦笑いしている奥様の愛さんの反応。実は愛さんは当初このような自然との共存生活には反対だったそうです。その理由を伺うと意外なものでした。愛さんは幼い頃、まさにこの様な古民家で育ったそう。いわば自然との共存生活のプロだったのです。それがいかに大変で手間と時間がかかり、重労働かがよく分かっていました。竈（かまど）での炊事、薪割り、お風呂焚き、井戸水での生活、全て経験してきたからこその反対だったそう。しかし、淳さんの一生懸命な姿と熱量を信じ、今ではこの地での豊かな自然の恵みに育まれた生活を楽しんでいるそうです。

地域の特色を守りながら新しい風を

「地元のものを使う、自然と共存する、地域の人との繋がりを大切にする」そんな小溝さんの元には同じ考えを持った若い力が集まってきます。中心部から少し離れたこの地区にもっと足を運んでもらうにはどうすべきかアイディアを出しあい実現したのが、昨年 11 月に開催された「外海文化市」。長崎の木材を使った木工作品や地元の食材を使ったフード、地域で採れた野菜など、初めての開催だったにも関わらず、午前中には売り切れ続出となるほどの集客となったこのイベントは、市の担当者も驚くほどの大成功を収めました。今年も新たな計画を練っているという小溝さんご夫婦。今後、地元の木材を使ったオリジナルの作品作りにも着手し販売したいと意気込みを話されました。これから更に注目を集める世界遺産大野集落。小高い丘に佇む木の温もり溢れる古民家カフェで、自然を愛し地域を愛するお二人の新たな挑戦が始まっています。

（NPO 法人地域循環研究所）

林業普及だより

県北地区　路網推進チームの取り組み

林業普及指導員による路網線形の提案

検討路線の現地踏査状況

林内路網整備の推進

長崎県では、森林の適切な管理、高性能林業機械等を用いた効率的な作業システムの構築のため、林内路網整備の推進に取り組んでいます。

林内路網は大きく「林道」、「林業専用道」及び「森林作業道」に大別でき、それぞれの役割等に応じて適切に組み合わせた路網整備が必要です。

また「林道」や「林業専用道」は、生産された木材を運搬する大型トラックが通行することを想定した規格となっており、林業施業を行う上でまさに「基幹道」となります。

路網推進チームについて

「基幹道」の開設には、多額の費用を要し、区域内の森林所有者の理解も得る必要があることから、開設には、地元市町による協力が不可欠です。

長崎県では、各振興局の林業普及指導員と林道担当者が連携した「路網推進チーム」を設置し、開設検討路線について各市町に対して、さまざまな提案を行っています。

県北地区路網推進チームの取り組み

県北地区は、管内の豊富な森林資源が充実してきており、大きな利点として近隣に原木木材市場があるため、林内路網整備が進めば、さらに運搬コストを抑えることができ、成長産業化につながります。

県北振興局では、リーダーである森林土木課長を筆頭に、森林土木課・林業課員が一丸となって、推進チームに参画し、毎月１回の推進会議では、活発な意見交換を行っています。

推進チームの今年度の取り組みとして、検討路線の現地調査を実施し、調査結果を基に新規線形の提案や鉄鋼スラグを活用した安価な路面工法の現地視察及び市町への提案を行っています。

今後県内の森林が主伐・再造林期に向かっていく中で、「基幹道」の存在の有無により、生産コスト、収益が大きく変わってきます。

また再造林を行って経済林として成立していくのかにも関わってきます。県内の森林・林業が持続可能な産業となることを目指して、路網整備を推進していきます。

＜林野庁 HP より引用＞

新たな路面工法の現地視察状況

（県北振興局　林業課）

地方だより

「森林ＧＩＳ研修会」を開催

森林経営管理法の施行などにより、林野行政において市町が担う役割は一段と大きくなっています。それに伴い、市町が抱える業務量は増加し、内容も複雑になってきています。一方、島原振興局管内では、各市の林務担当は１～２人と少ないうえに、市によっては、他の業務と兼務で林務の仕事を担っている方もおり、大きな負担が生じています。

このような中、島原振興局では管内各市の負担を軽減し、業務の効率化を図るため、６月 24 日に市などの職員を対象に、森林ＧＩＳの研修会を行いました。普及指導協力員の栄田（えいだ）　徹（とおる）さんに講師になっていただき、現在県内の各市町でも使用している県のＧＩＳシステム（ＭＡＧＩＳ）の効率的な使い方に関することを中心とした内容となりました。

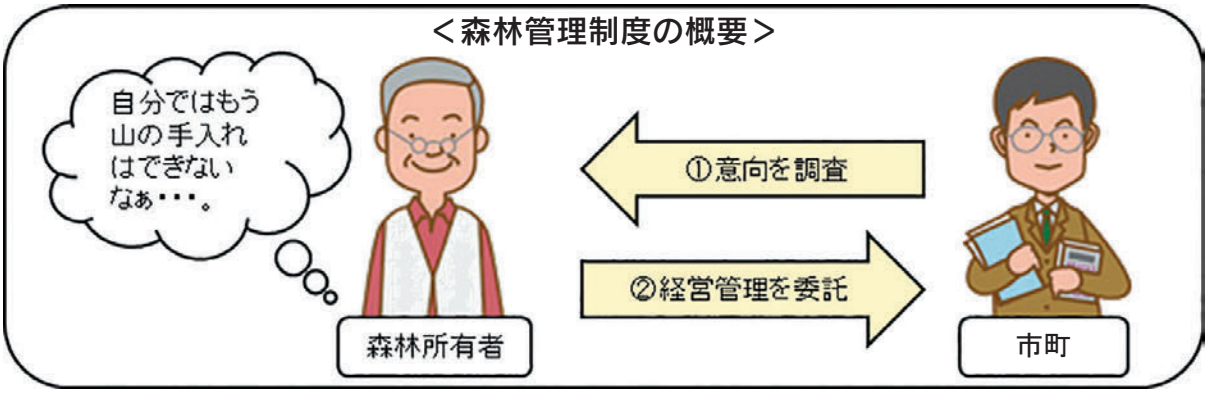
研修では、まず業務に必要な森林情報の抽出の仕方や地図上での着色の方法、それらを保存する方法について学びました。さらに、応用の機能として、抽出した情報の加工の方法、エクセルデータ化する機能についても説明がありました。参加した市の担当の方からは、「基礎的なＭＡＧＩＳの使い方は理解していたが、応用の使い方を学べて、ＭＡＧＩＳの利用の幅が広がった」という声があがりました。また、日ごろから抱いているＭＡＧＩＳに関する疑問を質問し合ったり、同じような悩みを抱えている市職員同士、情報を共有できる場ともなりました。

森林経営管理法の施行に伴い創設された森林経営管理制度は、経営管理が行われていない人工林について、市町が森林所有者の委託を受け管理していく制度ですが、市町が森林所有者の意向について確認したり、対象となる森林の状況の調査を進めるうえで、森林情報のデータ管理は必須です。今回学んだＭＡＧＩＳの効率的な使い方が、このデータ管理に活用され、市の業務の効率化につながっていくことを期待します。

（上・下）研修会の様子

（島原振興局　林務課）

＜森林管理制度の概要＞



地方だより

ツバキの実の収穫に向けて－ツバキの育成マニュアルより－

五島のツバキ

はじめに

ツバキは毎年２～３月に紅色の花を咲かせて６～７月頃に実が大きく目立つようになってきます。今回は、県が発行している「ツバキの育成マニュアル」の内容を基にツバキの種子の充実についてご紹介します。

五島のツバキの特徴

五島のツバキは遺伝的に県本土とは異なることが分析されており、独特の特徴があるものと考えられています。

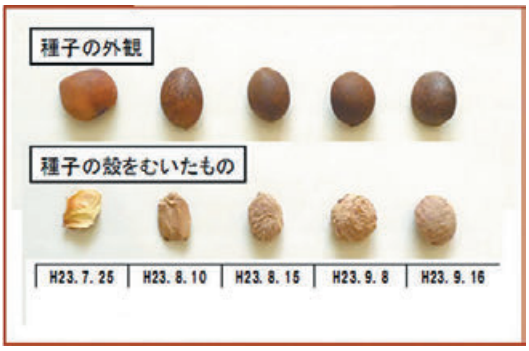
図鑑では種子の数は１～３個、多くとも４個とされていますが、五島のツバキは種子が５～９個入っている実が多く見られるようです。

五島のツバキの実と種子
（農林技術開発センター提供写真）

収穫前のツバキの実の中では

ツバキの実は４月から大きくなり始め、７月頃に成長が止まります。しかし、実の中の種子は、見た目は大きいものの中身（胚乳）はまだ充実しておらず、油分も少ない状態です。その後、胚乳は種子の中で徐々に油を溜めて大きくなり、９月頃に成長が止まります。

この時期は油も多く、収穫適期と言えますが、実際は個体によって時期が異なるため収穫には様々な判断材料が必要です。五島市や新上五島町が発行されている広報誌等では９月上旬頃から収穫することを周知しています。また、農林技術開発センターでは、近隣の植物の状況を収穫の判断材料に利用する指標植物の活用を紹介しています。（本誌 10 ページ参照）



収穫時期別の種子と胚乳
（農林技術開発センター提供写真）

終わりに

今回ご紹介した内容の多くは「ツバキの育成マニュアル」に記載してあります。必要な方は五島振興局林務課または農林技術開発センターまで問い合わせください。

【お問い合わせ先】

〇五島振興局　林務課
TEL：0959-72-2094

〇農林技術開発センター　森林研究部門
TEL：0957-26-4293

（五島振興局林務課）

林業団体情報

山地災害の未然防止に貢献する「山地防災ヘルパー協会」

長崎県山地防災ヘルパーは、平成９年に結成された山地防災のプロ集団です。治山事業経験者をはじめ、長崎大水害、雲仙噴火災害、県北地域の大規模地すべり災害などに携わった皆さん 186 名（R3 年４月末）で構成されています。

はじめに…

近年、各地で、集中豪雨、台風などによる自然災害が多発しています。

その一因として、地球温暖化による異常気象が考えられており、このことは、「災害が私たちのより身近な場所で発生してもおかしくない」と、肝に銘じておかなくてはなりません。

そのためには、自宅、職場はもちろんのこと、その移動ルートにどんな危険が存在しているか、また回避する避難場所、そのルートを常に把握し家族、周囲の人たちと共有しておく必要があります。

山地防災ヘルパーの日常の活動状況は…

第一に、県内に存在する「山地災害危険地区 3,068 地区の点検」。

山地災害危険地区は、地形・地質・林況などを数値化し、危険度の高い個所、例えば、急峻な地形、脆弱な地層、未立木のような個所が該当し、危険地区内で、小崩壊、亀裂、落石，倒木、川への土砂の流れ込みがないかなどを点検します。

山地災害危険地区は､県のホームページ(左上の「総合防災ポータル」→右の「長崎県電子国土総合防災ＧＩＳ」）から見ることができます。

次に、「治山・地滑り防止施設の点検」。

施設の老朽化には、コンクリート構造物の亀裂・沈下、傾倒、鋼製品のさび・腐食、構造物周辺の洗堀・流亡など点検します。

これら点検活動は、県、市町へ報告され、対策や予防に生かされています。そのほか治山事業や地域の植樹祭などで植樹された森の下刈作業などボランティア活動も実施しています。

また、ヘルパー会員は、総会時や県の地方機関ごとに研修会を実施し、技術向上を図っています。

これからの課題は…

現在、これまでに発生した大災害、本県では諫早大水害（Ｓ32)、長崎大水害（Ｓ57)、雲仙岳大火砕流（Ｈ３）などにおいても災害記憶の継承が課題になっています。

加えて、近年の被災地では、「かつて経験したことのない雨(風)」が､キーワードとなっています。今まで、崩れることのなかった裏山が崩れ、避難する道路は川になり、やっとたどり着いた避難所は水浸しという状況が発生しています。

こうした状況に対応するためには、危険地区や治山施設の存在とその概要を住民の皆さんへ知らせ、日常でも緊急時でも県・市町と一緒になって、対応できる体制の整備が必要です。

また、本県のヘルパー会員は、県・市町の治山・砂防等の経験者や建設コンサルタント、建設工事における防災の経験者等幅広い人材で構成されていますが、広域にかつスピーディーに活動するためには、会員が動きやすくする仕組み、データや現地のドローン映像を閲覧できるサイトやＳＮＳなどでの情報発信・交換を進めていくことが課題です。

今後も、県や市町と連携して山地災害の未然防止に取り組んでいきます。

（長崎県山地防災ヘルパー協会）

センターだより

身近な花が教えてくれる、ツバキの実の収穫適期

はじめに

ツバキの実が赤く色づき始め、もうすぐ実の収穫の時期をむかえます。

ツバキの実は、４月頃から大きくなり始め、７月には収穫時期と同じ大きさになります。しかし、種の中の油が増えるのはそれからになります。

五島名産の良質のツバキ油を搾るには、充実したツバキの種を集めなければなりません。早めに収穫してしまっては、種子が軽く、多くの油を搾ることは出来ません。晩くなると実が割れ、種が落ちてしまいます。

そこで、種子の充実時期を見極めるための方法として、指標植物に着目し調査を行いました。種子の充実時期は、毎年の気候によって変動することから、指標植物を使うことで、そのタイミングに対応できるからです。

[調査の内容・特徴]

１．福江島内の調査地で、種子中の油含有率の変化と同時期に花や実などが確認された66 種の植物のうち、共通して花や実などの特徴の変化が確認された８種の植物を収穫適期の指標植物にしました（図１）。

２．指標植物の花や実の特徴の変化は、調査地により１週間程度の差がありました。

３．収穫適期は、指標植物のヤブガラシ、ノブドウは採取地周辺で花が見られなくなる時期、カラスウリ、センニンソウ、ヤマノイモ、ベニバナボロギク、ヘクソカズラは花が少なくなり始めた時期、アカソは花が目立ち始めた時期、ノブドウの実が目立ち始める頃であることが分かりました（図１）。

それぞれの木によって熟する時期は異なってきますので、早く実が割れる木には印を付け、早く収穫するようにします。

まだ暑さが残る時期です。熱中症やムシ・ヘビなどに注意しながら、ツバキ実の収穫を進めてください。

（農林技術開発センター）

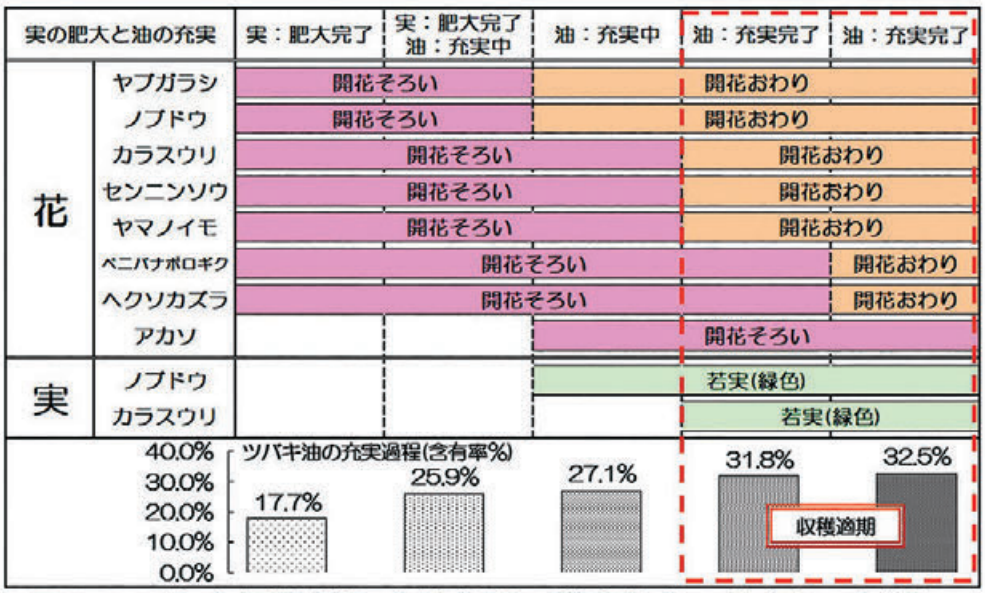


図１ ツバキ実収穫適期の判定指標 （指標植物の花や実の変化）

開花そろい：周辺同種の開花状況が目立つ状態

開花おわり：周辺同種の開花状況が目立たない状態

ヘクソカズラ

カラスウリ

ノブドウの実

紹介コーナー

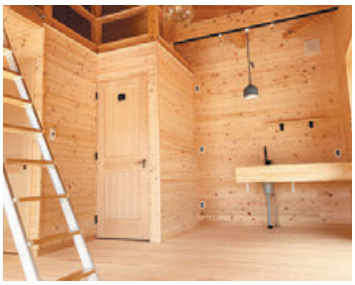
西海市　タイニーハウス西海モデル

タイニーハウス西海モデル外観

西海市西彼町に、西海市の林業振興の一環として、タイニーハウス西海モデルが建設されました。タイニーハウスとは「小さな家」のことで、建築面積は約７坪。建材の 50%は西海市産のヒノキを使っています。きめが細かく濃いピンク色で香りが強いのが特徴で、室内は檜の香りが漂う落ち着いた空間になっています。土間やロフト、建物と同じ広さのヒノキ製ウッドデッキも備えており、テレワークや週末別荘としても使用できるように工夫されています。

タイニーハウスの今後について、西海市西海ブランド振興部農林課の里中課長補佐にお話を伺いました。

「市内人工林の 94%を占めるヒノキは、年々生産量は増えていますが、一部の製材品を除き市外への丸太出荷が中心のため、地域における経済効果は限定的で、地域内循環の面でもうまく機能していない状況です。これを打開するためには、木材生産量を増やすと同時に、西海産ヒノキの特徴を生かした商品開発やバイオマスを含む地産地消も進める必要があります。タイニーハウスは昨年、市内の関連産業で組織した研究会の成果のひとつですが、今後連携を強化し、「ＤＩＹハウスキット」など、様々な提案を行っていく予定です。」



西海市産のヒノキの内装

【お問い合わせ先】
西海市 西海ブランド振興部 農林課
TEL：0959-37-0070
FAX：0959-37-0220

伊万里木材市況

【ヒノキ】　令和３年７月現在

長さ	径級　ｃｍ	等級	高値（円／㎥）	現在出荷量	現在引合	需要見通
4m	16~18	直	38,000	少ない	多い	多い
	16~18	小曲り	37,000	少ない	多い	多い
	20~22	直	30,000	少ない	多い	多い
	20~22	小曲り	28,000	少ない	多い	多い
	24~28	直・小曲り	28,000	少ない	多い	多い

【スギ】　令和３年７月現在

長さ	径級　ｃｍ	等級	高値（円／㎥）	現在出荷量	現在引合	需要見通
4m	18~22	直	21,500	普通	多い	多い
	16~22	小曲り	20,000	普通	多い	多い
	24~28	直	21,500	普通	多い	多い
	24~28	小曲り	20,000	普通	多い	多い

※情報・お問い合わせは、伊万里木材市場　電話 0955-20-2183 まで

長崎の山：琴ノ尾岳 451.3 m（長与町・諫早市）

頂上から見える長崎空港

琴ノ尾岳は長与町と諫早市の境界にまたがる山で、標高は 451.3m です。長与町では一番高い山になります。諫早市の入り口である県道長与町多良見線の松頭トンネルの少し前の分岐点から車道が接続しており、頂上まで上ることができます。車を利用すれば 10 分程度の道のりです。琴ノ尾岳の麓にはみかん畑が広がり、一般的には長与町側で生産されたみかんを「長与みかん」、町境のトンネルを越えて諫早市多良見町伊木力で生産されたみかんを「伊木力みかん」と差別化しているようです。

さて、頂上には琴ノ尾神社、展望台・運動広場などの施設も設置されています。また二等三角点も設置されており、明治時代には国土を確定するための重要な測量点であったのではないでしょうか。展望台から南部方向を見渡すと、女神大橋、稲佐岳、及び岩屋山などを一望することができ、大村方面を見渡すと大村市や長崎空港の全容を間近に見ることができます。また、山の南斜面方向で標高 410m のところに烽火台跡があります。この烽火台は江戸時代に造られたそうで長崎港で何か事件が起こった時、のろしを上げて緊急事態を大村藩に伝えたのでしょう。

琴ノ尾岳は長与川の水源です。長与町に降る雨は 1 年で約 2,000 ミリメートルと雨量は多い方です。しかし長与川の流域は、周辺の地形が急峻で広くありません。雨の降り方も梅雨期と台風の時期に偏っており、利用できる水の量は不足気味です。４万人以上の住民が暮らす長与町では、水は大変に貴重です。

長与ダムに集められた水は一旦ダムで貯水したあと、生活用水として少しずつ取水されているようです。琴ノ尾岳の流域には藤（とう）の棟（むね）ながさき水源の森も指定されています。琴ノ尾岳の水源かん養機能は長与町の水源として非常に重要です。

長与ダムから見た琴ノ尾岳

また、琴ノ尾岳は大村湾県立公園に指定されており、レクレーションで登山をするには最適です。休日にはサイクリングで頂上を目指す人たちも見かけます。徒歩で上る場合、登山口は何か所かあるようで、自分の体力とスケジュールに合わせて山登りを楽しむことができます。家族連れの登山もお薦めです。琴ノ尾岳で四季を楽しんでみてはいかがでしょうか。

（NPO 法人地域循環研究所）

長崎の林業　8 月号　第 791 号
編集・発行　長崎県林政課
住所：長崎県長崎市尾上町 3 番 1 号
電話：095-895-2990
ファクシミリ：095-895-2596
メールアドレス：
s07090@pref.nagasaki.lg.jp